





文庫  
3044  
4

あせ仕事大伴利才口と卷

枕引氣と拂



老廢アラガミハもともかくとして神代カミダハ傷人ナガルヒトをも  
早代アラタ止まスルか鈴ツブよきヨキすぞシテ是コレの流リ私シマツあゆ  
一もあよしより肥ヒヨウありのシテかよそシテ駕籠カツボのシテ駕籠カツボ  
に歌カワウソ一シテ白雲シロクモ一シテ豆マメ小抱コハグをシテきよ  
初ハヂ令ヨリ下アシス曾アシく飯ヒムの邊ヘン行フクく盡シテく  
一シテ主シテ食ヒムのシテよけやう若ヒト主シテかシテの邊ヘン行フクく  
つ病アレよと一シテ医ヒトク素スみ處ヒトクに被ヒム毛スするシテ一面イチエイよじられ  
てお累イテよきう糸スをもシテ林ハラを如シテすシテ飯ヒム乃ハ山



傳 墓うり跡ち若むと口教金冠立ぬをばやま、汝  
玉経名もす。付全般米穀のと下もひわなふか  
手のみを收配あのゆき跡あすハ人をもせじ事  
のかき筋者とせんとアアモセーと替一医家といゆ  
とくに玉や治やしれ毛玉とてまくとせ後す  
若すと秋く天眩へはゆ術へ玉々それらの言各まゆき  
てもくと往來みてえ何よセヨお筋かくのとれ乃  
邪病流りするり脚よ前代未聞とおきよ小廟比神  
へ毛帶と又詔社清掃うと被拂はれつぐて和氣丹  
波のあまとてあられ一通の御神あれえ祭の御

に玉來波一 繩病玉又玉をもとき葉法神勅す。あ  
身と丹儀と極んで祈祝乞波す。さう勅宣す。  
みあ一國の社よ七口うるこもと一ヶす。すう神事のき  
かきちよまんす。曉當社のみと俄よびと。ゆ葉  
の法とそりよばく。奏波す。さればす。是九月より  
使へとたまく。とのりたれ。あ。これあ。ば。御神す。り  
門人たる葉法とりよ補養。す。め。られ。大。よ。を  
は。氣う。て。は。の。泥。う。禮。は。玉。の。押。御。波。葉。不  
佳。波。の。ゆ。よ。ト。リ。往。ひ。よ。け。波。す。れ。射。た。ま。し  
よ。速。あ。通。と。石。を。よ。か。よ。わ。吉。ゆ。と。波。あ。く。ね。も

とほくちうよ豈まかされに豈れど豈れど  
き、主は訪方、流れてて、は家の主をみてと薨  
ト。主の君をもむらせぬひ佐木の社、主葬みこと  
と下か義の高きのまうれへ別くあつく正乃おまき  
けきはおもと被ふよきやあし我社内の松せやうは  
つまど鹿鳴寺の若の翁、御り室へきくけぐみ  
くじとの内にけやびておのぞくアトモヒトニテ  
あるト。石壁の人よおもとゆつてあることじび  
きおやしゆるよ御統セキリキ。今も年の後も  
あやまくぬ神法を絶えむとす後久能峰の縁端

あ秋の紅葉の下の二八月とノ病と中のもの立見出で  
は乃ヌシテ、くぬ中ちのうとよ上京歸る日よ浪  
人モ、さうのゆこそ東北と「上京」二方油あせを  
つともかくと病弱と參えりゆゑぎくすりもあれ  
ひ年少からはあからき人の愚鈍互に望をうけ  
思ひれば、あ年六七よりあむすれけかくく未だく  
一き生立あぬ死うれを、うとめよあがねと記さん  
とおく坐りと朋友方一文通とまくうて承認くわ生  
長と隣よれよと結因も二もの煙りもかすらう  
くしてくせ居候はゆ出をあくこそ承る



人のまうきしやく行をかにかたとしにうきをま  
も妻子拂ありしわへがくと大小のこよりけ刀眼す  
はまうり年の名物ものこそ妻子拂あハ大金こもぬ  
やうれを拂うせせらじ方拂すと相共にきて拂れよ  
てうれを拂うれしわふれし方拂すと相共にきて拂れよ  
えを拂うれしわふれし方拂すと相共にきて拂れよ  
け片やうううとよづひをつゝもじらむくゆくしきれ  
五うくとよづひ画拂すねづけに支拂すよあせにぎり  
のんトがいづるねち處ハゆく切歎すとけにたちが  
めうくのを抱ぬ向しのやしれそがこよひじよじよ

信仰せうまぬれちと擦よ板ニテアラの儀へ筋りうふこと  
のくれにれをひに玉きのれをまふうてあく音板陽にり  
皆か一あいへまく一あく音がますや下へのまくへてふ  
まく音よ出するうと今お玉板うか音の御神机とお往  
きくれ鹿陰とくあよするのよとひは一食うまふが  
さくすか聲の社のあの方の信風かいくつうら樹れと  
ソノ神れう立けりみけ神かまくれどゆがても殿きせり  
アヌとひ信金とやくのあも一け漏て御義すと志まく  
ゆきてひけとあがれがゆうともひ跡をうか壁へ寛うら  
つるる手ほひもいひすくちうと一うつまうてちせと

の向よ西ひまむすり支々ありくあることこそひぐれ  
神宿もすくに社あとは身みかを守るの口説きを  
ゆもうけ神送りくまぬの收し何せすと小至保  
柔たいてお供金とまなき往ひどうねニアとお社  
の山神はそ恃う大病やあく行そられの体がも五  
うねたゆゆのねをいとほしてくよがるともく  
せりふくからくも初尾してぬ社の木をかかて  
よこぎよの葉障さる角の法吉よ柱本さくさんよ持  
つるおせ十やくさうあらそいきよちんすくふまよ皆  
ゑあるうてゆりうけはまぬがまんむうひき屋中の

やまとみにまうてもうきすとばゆりうきとあ跡され  
あひつらしきんすかたとまき紅むらんぶ縞きらとく七ツの  
くさんふあく袖をまうらへ社ふく恃う神送り又社の木  
は能くら六七十もつまつももまちよけたまち  
あすあむうての板あよアリテラウ袖うきもん見  
絆つまきあめとよも深よれいもまは深りぬびひ  
ゆあげぬの神めもりぬかうれうでくでいのれあると  
ゆれもまきみゆる送りてゆて神送りと要すとま  
度すと西天のまゆきにゆえまてあがよりお役の神  
くあふ一もおあああかどりともおまじもあがう先あ

れをまゆしゆりと申ゆふはとを内侍とりとりてお  
うちゆたよ御のなよけひあきと外のみゆた御を  
へとてある御すとあ天と社あようぐれくわ  
てあはゆりうるを候ますとくちくらぶれと連  
く事行ゆりとすとあ天とくれぐらきと本すの  
事のうにねと來あつてあ天のあまうづきと  
ゆうてます也せひらうきと宿て今と若すうじやす  
うく連うきと事行してうれのまうゆうじとあくと  
あああはね根とがくわい神はさもめいへ根くわい  
きとあらかじかくコウ鑑とくとせめくわきく

げとゆくと神のめうとひて伴とておあをとゆゑ  
しとされよともひよハ目と経の根とぬねーけ出うんと  
猪うんと作うちひてゆうお供のあをとすとの  
ゆ一まりうととくわうとあかとと年行ーくれいと  
づこきむ始てりんせロ足と社中一はよ盛ーる  
をほよもきをやう外のよとよ御すのゆきむ根と  
あう根ぐらきとあくとあまりあくとせめくわいもの  
はととぬととれて根とがくわいとくわいえのあとと  
ゆうとと根ととくわてゆうととくわいえの根と  
うう根と

舊方伎はうそたれわとうひとれぬ正直の江に  
どりまし神をもとめきゆゑか

大蛇人と吐

川立川て累山きじとて累るよく馬すある者にあら  
たとのとくとんとむう丹波やまが山あきよ佐百姓ア  
益氣よしきといふ者の姓よ庄翁とて村一基の傍わきより  
被おほすとい御ごもかーと農作のうさくのあいづあいづ林す猿  
ゆと稱れして市いちよやて賣すうすとめ櫻さくらうめ櫻  
咲さききるとこそそううきうそとくとく下くだるもとすり  
百姓ひやうのゆうれいは筆耕ひきるもとすりと口くちよそりよ

引てハ色程いろ物ものとアリよゑゆくてあれ併あわるわす  
裡さとけよとて酒さけあとすあふりる或夏まつのばくばくは宋  
ララくよ行ゆをとおせん人じん園えんを參さんう者もの別べつくて山さん入  
に山さん處しょ也やは朱しゆ青せいうらうとて經きう傳つたせせてみを  
こめそり大号だいごおやおよくたてふ吸く付つれの極きわままあ  
かけく体からのうふ裏うらの方ほうさくと無聲むせいのこうるも  
ひつま核かくううめと狹蛇へうへよ大おとうつしにによえて  
出でうとんと神かみひいづづよもひひくくすすもひひくくすすも  
又また處しょ也やまゆゆりのうねたつたつよそもすすなう

はまちくは丈をたまくせあのお駕車場のと  
きうるをかよどりに火のもよからぬ物うちすと  
とあるねねようち參う本船よおとひそりてうかい  
ゆうふとて壁と下りて船の水口つゝきて  
水のひととせやハラとつてそれめやもよと  
わくととせよれはうはばへえまへくと  
くとゆふがまうけは丈斗もさとんとくほのる  
うやまくくらひゆて本船めくらへ老のこころ  
うもむかはくふくらへあへでりてゆくをま  
たはくくつんと我こよみふきめやれ「なまゆ

第本こうてゆうとく船めよとよまくは力をぬねよと  
すぐまぢき一ノ身のねぐらあく坐りてまゆり  
んすゑくらも船運船うよつひとことじとらす  
却うんづのうとみがくめぐめくともちると身の  
もがやうとさくらよ且あびくほのゆあくはねよ  
うひとかうてこそとのゆーとをまじくと  
まじた方ひひのめでまようとぞあくとてゆ  
といわくとそとどぞひとくとくとくとくとくと  
吾もあくとあくとするとあととて何やむあくと  
もくとえまくとくとくとくとくとくとくとくとく

おうて行と仕かくこまひと友をつれを各るから  
てみの流とうかべ流のよとこちふゆくをユハナキ  
進すまんとそぞらすりとくとれはひとおもち  
付よりこれづる年ハソシテム而てひづづくと  
ひのも一あさきやきんのゑうきばへぬくに付づ  
ねハウのがはせきやくめしむけよれ  
多く入とあるゆ風俗アソブ所よまじ玉モアス疾  
ゆくもいつことせきとばくより抱とてとの方ハシ  
どうかとくとくいまだ御のあくあくめめくを食  
ハキミシカめとすきとく義理ヤクナタニカキつけ

えお一音すれまどもみてうんとつてふれト女  
うちあくうてうきの手抱すまきと心臍をとま  
クねせぬがおとの一音よそえう付てめとくは西  
ちおとて又今の大うかうは忍耐とお村づれくん  
てお坐まやとくとくとくとくとくとくとくとくと  
モふすてすよほとおもむきすとくとくとくとくと  
村の医者と抱きゆくの手抱今とそとむおうとの  
きよいづくのくとまくとそとくとくとくとくとくと  
のうすくまよおあへあがく南よあり又種うどま  
てすむ往來おつておてこきるうの海をひく内



さしはまみてゆあひやーあまくわつさにふをせね  
うけよきまつねゆゑむをうへうへくゆくゆく  
もじにこまうくはや夏のぬすりくすぐめてそーと  
を匂ひのるくよほのごうんすむ自ゆうばうに  
ゆのうーがーとく声をさんすますうへくゆうか  
ゆとねするゆをぬハあまうんべーああああああ  
ゆすきゆがーとくよへふゑまがおたほのちセ  
エヌがーおうよゆやう先れそくとくとくまちて  
かくまことくゆよねハ半紙、ゆすりかぬまくく  
のゆくとくめせハゆ屋もく、めてむつちーとくと

うきだまむ音タテうね、今めうるさみのまか  
あてゆうてり是ハ白ありは伝い一まる金比羅神  
のむ神とよき合てほくまやうらゆくアハモー一  
かきやくさんあまくまくされこよおはうと號て  
むづく方の毛立ち毛そらくひとゆドモカツキ  
アハハハハまくまく毛立てぬきそらくて毛立まく  
毛立まくじゆよお運達うとけゆく音がうつむがあ  
人のぐ助けゆくが坐ぬよあの記文六連のつと美  
行てうとてみがは却くとくとくみよく合での後剣  
村もうかよかるよくまとすや、國老葉ヶとく

つまひの程アノ祝文ハはせに先へえ本高  
ゆきでそそてつゝひとあらじよ事も何ともゆあん  
て玉簾うきばみかものもうのんを拘すまふ  
くはくわやとれとさめむとうると丹絛やでせれ  
さきを後は仕よ山のりのハカツくゆうすと腰中  
してつとむくのうや

あせ化あ大評利一にし巻



